

## 博士學位論文審査要旨

氏 名	加 藤 里 織
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博甲第 278 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文の題目	奄美ブラジル移民史研究 ―移民名簿とオーラル・ヒストリーを中心に―
論 文 審 査 委 員	主査 神奈川大学 准教授 後田多 敦 副査 神奈川大学 教授 佐 野 賢 治 副査 神奈川大学 教授 山 本 志 乃 副査 神奈川大学 名誉教授 森 武 磨

## 【論文内容の要旨】

本論文は、鹿児島県奄美地域からのブラジル移民を対象にして、その歴史的全体像を明らかにし、奄美移民が移民先のブラジルで形成した「奄美」アイデンティティの存在と、そのアイデンティティが2世以降へどのように継承されているのか、また母村へどのように還流しているのかについて考察することを目的としたものである。移民名簿や記念誌などの資史料と現地でのフィールドワークで得た資料を基礎データとしている。

論文の構成は以下である。序章から終章まで、全7章で構成され、最後に参考文献一覧と図表一覧、それから付録資料として、資料目録、年表、奄美ブラジル移民名簿を付している。

序章	問題の所在と本研究の構成
第一節	本研究の目的と背景
第二節	先行研究と問題の所在
第三節	研究方法と対象
第四節	論文構成
第一章	移民名簿にみる奄美ブラジル移民
第一節	移住者名簿にみる奄美ブラジル移民
第二節	入植地記念誌名簿にみる奄美ブラジル移民
第三節	在伯鹿児島県人会記念誌と聞き取り
第四節	移民名簿の再検討と新たな移民名簿の提示
小括	
第二章	奄美の「移民村」宇検村
第一節	奄美の「移民村」宇検村
第二節	戦前の宇検村移民

第三節	戦後の宇検村移民
第四節	呼寄せ移民
小 括	
第三章	ブラジルにおける奄美郷友会
第一節	郷友会
第二節	ブラジル奄美会
第三節	奄美会館建設
第四節	分裂と解散
小 括	
第四章	「奄美」として生きるブラジル移民
第一節	「奄美」として生きるブラジル移民
第二節	ブラジルから奄美へ
第三節	交流と還流
小 括	
第五章	「COMUNIDADE AMAMI (コムニダーデ・アマミ)」
第一節	「奄美」アイデンティティ
第二節	「UNDOKAI (運動会)」
第三節	「コムニダーデ・アマミ」
小 括	
終章	本研究の総括と展望
第一節	成果と意義
第二節	新たなる課題と今後の展望

## 参考文献

## 図表一覧

付録資料 資料目録、奄美ブラジル移民年表、奄美ブラジル移民名簿

本論文の内容は以下のように要約できる。

序章では、研究目的を示しブラジル日本移民研究と奄美移民研究の研究史と、移民資料について整理している。そのなかで、従来のブラジル日本移民研究では、奄美が鹿児島県という括りで整理されることで、その独自の位置について見落とされてきたことを指摘した。その上で、奄美が日本本土と沖縄の間に位置することで、他の鹿児島県地域や沖縄とも異なる歴史を持ち、複雑なアイデンティティを形成していることを説明し、奄美に着目する意味と意義を研究史に位置づけた。

また、従来の研究の対象地域が移民を輩出した宇検村に偏っているほか、ブラジル側資料が利用されていないなど、地域や資料に偏りがあることも指摘。ブラジル・サンパウロ州での文献史資料の調査、聞き取り、参与観察に基づいて、奄美全体を対象にしたことなど、本研究の対象や方法と資料などを説明している。

第一章「移民名簿にみる奄美ブラジル移民」では、移民名簿の悉皆的な整理分析を行っている。そして、従来の研究で基礎資料とされてきた『海外移住者名簿 1965』に加えて、戦前移民では移民会社作成の移民船乗船名簿『伯刺西爾行移民名簿』（原簿）、戦後は海外移住事業団作成の『戦後海外移住者名簿』を合わせて検討、そして新たに見つかった移民を含めた「奄美ブラジル移民名簿」を独自に作成した。

この名簿の悉皆的分析で、戦前・戦後を通じた奄美ブラジル移民の全体像を把握し、奄美ブラジ

ル移民数は、戦前は128世帯723人、戦後は57世帯198人、総数185世帯921人であることを明らかにしている。また、1912年にブラジルへ渡った榎常孝の存在を明らかにし、従来1918年とされていた奄美ブラジル移民の開始年を遡らせた。

第二章「奄美の「移民村」宇検村」では、奄美で最も移民を送出した「移民村」である宇検村に注目し、戦前・戦後を通じた3家族のライフヒストリーを通して、「戦前移民」、「戦前移民の戦後再渡航」、「戦後の呼寄せ移民」の生活実態に迫っている。そして、「中規模農家」が「より良い生活」を求めて移民に至った経緯や多様な移民の生活実態などを紹介している。また、現在では奄美特有の言葉や文化が継承されていないことなども明らかにしている。

第三章「ブラジルにおける奄美郷友会」では、ブラジルで結成された「ブラジル奄美会」を事例に取り上げた。奄美で発行された新聞・雑誌記事と、現地ブラジルでの写真や記録映像のほか、フィールドワークで得た聞き取り資料を中心に分析を行い、「郷友会」の成立過程とそこで行われていた文化継承の状況、会館建設への取り組みから郷友会の分裂から解散までを確認した上で、会の持つ性格と組織的特徴について明らかにしている。

第四章「「奄美」として生きるブラジル移民」では、ブラジルで生まれた「奄美」アイデンティティをめぐる問題の事例を紹介し、その特徴を分析している。故郷の奄美では各自の「生まれジマ（出身村、地域共同体）」にあったアイデンティティが、ブラジルでは広く「奄美」という形で表現されるようになっていたり、ブラジルで生まれた「奄美」アイデンティティが、一時帰国などを通じて故郷奄美側へと還流していたことも明らかにする。

第五章「COMUNIDADE AMAMI(コムニダーデ・アマミ)」では、サンパウロ市東部ヴィラ・カホン地区に住む奄美出身者とその子弟の団体「コムニダーデ・アマミ」が開催する「運動会」を事例に、2世以降の世代に継承された「奄美」アイデンティティについて論じた。年に一度の運動会で、自分たちを表すシンボルとして「奄美」という「言葉／漢字」を用い、揃いのTシャツを作成・着用して、「奄美／アマミ」アイデンティティを確認し、再生産をおこなっていることを指摘する。

終章「本研究の総括と展望」。研究の成果として(1)移民研究の基礎資料である移民名簿の悉皆調査を通じて、奄美ブラジル移民数が戦前は128世帯723人、戦後は57世帯198人、総数185世帯921人であることを明らかにした。(2)移民のオーラルヒストリーや参与観察を通じて、奄美ブラジル移民の生活実態の一部を明らかにした。(3)新聞・雑誌記事の整理を行いブラジル奄美会設立と解散それに会館建設の詳細な経緯を明らかにした。(4)ブラジルで形成された「奄美」アイデンティティの存在を明らかにし、2世以降の世代が「奄美」という言葉自体をシンボルとして自らのアイデンティティにしている事を見出したことの4点を挙げて再確認している。

今後の課題としては、2点を挙げる。第一点はブラジルの「奄美」アイデンティティの「奄美」の踏み込んだ解明、そして移民簿をもとにした島ごと、市町村ごとの個別研究と奄美での調査の必要である。

## 【論文審査の結果の要旨】

本論文の評価すべき第一点は、従来のブラジル移民研究で見落とされてきた「奄美移民」に着目し、その歴史的全体像を描き出したことである。言い換えれば、「奄美ブラジル移民」というカテゴリーを発見し位置付けた点である。第二点は「奄美ブラジル移民」の悉皆的な名簿を作成して提示したことである。第三点はブラジルにおける「奄美」アイデンティティの存在と継承、母村への還流などを明らかにした点である。

本論文の学問的貢献として次の点を挙げたい。

第一は評価点でもあげた、論文の主題でもある「奄美」という地域を抽出したことである。従来の研究で鹿児島県に包含されていた奄美を独自のカテゴリーとすることで、研究の欠落点や資料の漏れなどを浮き彫りにした。さらに、奄美アイデンティティの特徴や問題の確認へと結びついた。この点は、日本の移民研究で「奄美ブラジル移民」というカテゴリーの発見と位置付けという大きな貢献である。現地奄美の近現代史研究にも重要な情報を提供することになり、学問的貢献は移民研究に止まらない。

第二は移民情報の追加と新名簿の作成である。本論文で作成された移民名簿は、従来の名簿を更新し、現段階で確認できる最も詳細な奄美ブラジル移民名簿となった。新名簿では、奄美ブラジル移民は1918年に始まり、戦前は128世帯723人、戦後は57世帯198人、総数185世帯921人とした。「奄美ブラジル移民名簿」は本論文の根幹成果でもあるが、同時に今後の奄美移民研究のベースとなる不可欠な基本的資料となる。この点は研究史における極めて重要な貢献だと評価できる。

第三は本論文が、奄美ブラジル移民の歴史的輪郭をとらえることに成功する一方で、さらに個別具体的に一人ひとりの人間まで特定し、個人レベルまでのたどり着いている点である。資料的制約やプライバシーなどの問題もあり、悉皆的でありつつ個別的に分析していく手法を実現することは困難である。本論文は名簿作成とフィールドワークの充実で、この課題をクリアして悉皆性と個性を両立させている。貴重な方法と成果である。移民史研究における新しい方法と具体例の提示だと位置付けたい。

第四は、移民のアイデンティティの問題についての事例を提示したことである。歴史的背景もあり、故郷の奄美では各自の「生まれジマ（出身村、地域共同体）」にあったアイデンティティが、移民先のブラジルでは「奄美」という形で表現されていることを明らかにした。この点は移民先でのアイデンティティの問題だけでなく、「奄美とは何か」という奄美研究の中心テーマとも強く共振する内容で、奄美研究への重要な事例提供でもある。現地調査が少ない奄美ブラジル移民の現地の実態を伝える事例を提示した学問的貢献も大きい。

本論文の評価点や重要な成果を四点に代表させたが、幾つかの課題も挙げられる。その一つはブラジルにおける「奄美アイデンティティ」についての踏み込みが足りないという点に集約できるだろう。移民先でのアイデンティティの在り方だけでなく、奄美での移民者の位置づけとも結びつく課題だ。また、日本の他地域も含めた移民史、さらには人の移動や移住なども視野に入れる必要があった点なども指摘できるだろう。ただこれらの課題は、本研究の成果を損なうものではない。本論文の資料や分析の結果、具体化された本論文のテーマを深化させるための次の課題でもある。

本論文は、「奄美ブラジル移民」をカテゴリー化しその基礎資料を整備した点に視点とアプローチの新しさがある。また、名簿の収集と整理分析による移民名簿データの更新は、歴史民俗資料学の視点と方法を具体的に展開したと評価したい。また、奄美移民がブラジルで形成した「奄美」アイデンティティの存在とその継承、母村への還流などを明らかにした点は、移民史におけるアイデンティティの問題だけでなく、奄美研究に新たな視点と知見を提示している。

本論文が提示した資料や新たな知見は、移民史研究や奄美研究、そして資料学にも大きく貢献するものである。また、研究内容はもちろん、問題提起や資料の整理活用、方法などにおいても今後の進展を期待させる。

審査員は口頭試験を通して、本論文の課題や論点に対し質問したが、いずれに対しても適切な回答がなされた。以上を踏まえ、加藤里織氏に博士（歴史民俗資料学）の学位を授与することが適当であると、審査委員全員で判断した。